

JOHAニューズレター

第34号

日本オーラル・ヒストリー学会第16回大会（JOHA16）のご案内

日本オーラル・ヒストリー学会第16回大会(JOHA16)が2018年9月1日(土)、2日(日)の2日間にわたり東京家政大学において開催されます。お誘い合わせのうえ、ふるってご参加ください。

【目次】

I. 日本オーラル・ヒストリー学会	2. 自由報告要旨	08
第16回大会		02
大会開催校より	II. 理事会報告	14
1. 大会プログラム	1. 第八期第3回理事会(2018年6月16日)	
第1日目	III. お知らせ	17
特別講演会	1. 会員異動	
第1分科会	2. 2016年度会費納入のお願い	
第2分科会		
研究実践交流会		
第2日目		
第3分科会		
大会校企画テーマセッション		
シンポジウム		

.....
*ニューズレター掲載のメールアドレスは、(at)部分を@に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

《大会開催校より》

JOHA 第 16 回大会を、9 月 1 日（土）・2 日（日）の両日、東京家政大学で開催します。

東京家政大学は、1881 年に創立され、「ひとの生（Life）を支える」職業人の育成と、女性の主体的な生き方をめざす教育を行なってきました。本学とオーラル・ヒストリーとの直接の関わりはないように見えますが、ひとの生を支えるためにはその人の声や言葉を聴く必要があることから、教員・学生・卒業生は、「生を支える」それぞれの現場でオーラル・ヒストリーとつながってきたといえるかもしれません。

今回のシンポジウムは媒介者を通して「食」を論じ、研究実践交流会では「Listen する経験」と「書くこと」について議論されます。魅力的な自由報告 3 部会に加えて、女子大ならではの問題意識に基づいた特別講演会と、「女性の声を聴く」というテーマセッションを企画しました。

まだ暑さの残る 9 月初旬ではありますが、交通アクセスのよい庶民的な街・十条で、みなさまのご参加と熱い議論をお待ちしています。どうぞ JOHA 大会にお越しくください。

JOHA 第 16 回大会開催校理事 岩崎美智子（東京家政大学）

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第 16 回大会

Japan Oral History Association 16th Annual Conference

開 催 日：2018 年 9 月 1 日（土）、2 日（日）

開 催 場 所：東京家政大学板橋キャンパス 16 号館

交通アクセス：JR 埼京線「十条駅」から徒歩 5 分

駅からの地図：<http://www.tokyo-kasei.ac.jp/about/access/tabid/99/index.php>

大会参加費：会員 1,000 円、非会員 一般：2,000 円、学生他：1,000 円

懇 親 会 費：一般 4,000 円、学生他 2,000 円

JOHA16 実行委員会：岩崎美智子*開催校理事、金城悟、松本なるみ（以上、東京家政大学）、松平 けあき、伊吹唯（以上、上智大学大学院生）、池川雅美、塚越亜希子、鳥居希安、林祐子、若林 美千絵（以上、東京家政大学大学院生）

学会事務局：人見佐知子、研究活動委員会委員長：田中雅一、会計：上田貴子

大会に関してご不明な点がございましたら、JOHA 事務局までお問い合わせください。

E-mail：[joha.secretariat\(at\)ml.rikkyo.ac.jp](mailto:joha.secretariat@ml.rikkyo.ac.jp)

◎ 自由報告者へのお願い

- 1) 自由報告は、報告 20 分・質疑応答 10 分（合計 30 分）で構成されています。
- 2) 配布資料の形式は自由です。会場では印刷できませんので、各自 50 部ほど印刷し、ご持参ください。
- 3) 各会場にパソコンを準備しておりますので、ご利用の場合、USB メモリ等にプレゼンテーション

ンのデータをお持ちください（ご自身の PC 等をご使用の場合、RGB ケーブル接続のみで USB などの接続方式には対応しておりません。必要な方は変換アダプター等もご準備ください。念のため資料を保存した USB メモリ等もご持参ください）。動作確認等は各分科会の開始前にお願いいたします。会場担当者にご相談ください。

◎ 参加者へのお知らせ

- 1) 会員・非会員ともに受付してください。参加にあたって事前申し込みは必要ありません。
- 2) 夏期休暇中につき、学内の店舗は休業しております。昼食は各自でご用意ください。近隣のコンビニまでは 10 分程度かかります。
- 3) なおロッカーおよびクロークはございません。荷物は各自で管理をお願いします。
- 4) 「十条門」は、1 日（土）は終日開いていますが、2 日（日）は 8：30～10：30 と 15：30～17：30 のみ開いています。それ以外の時間帯は、「正門」までおまわりください。

◎ 懇親会案内

9月1日(土) 18：15～20：15

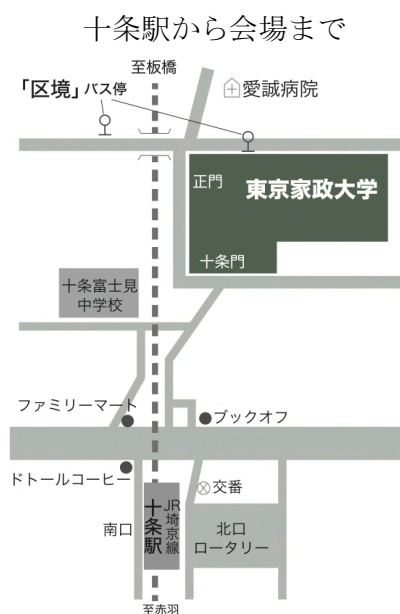
会場：東京家政大学 16号館1階 食堂ルーチェ

参加費：一般 4,000 円、学生その他 2,000 円

◎ オーラルヒストリー実践ワークショップ「現地と作品を結ぶ」写真報告コーナー

9月1日～2日の大会開催期間中、16号館1階ロビースペースにて、オーラルヒストリー実践ワークショップ「現地と作品を結ぶ～著者とともに『消されたマッコリ。』の舞台を歩く（6月10日@大阪府泉南郡岬町多奈川地域）」の写真報告コーナーを設けます。ぜひお立ち寄りください。

◎ 地図



1. 大会プログラム

第1日目 9月1日(土)

11:00 受付開始

12:00~13:00 特別講演会 161B 講義室 共催：東京家政大学女性未来研究所

語り得ぬ性被害—戦時暴行による妊娠と中絶をめぐる—

【講師】樋口恵子（東京家政大学女性未来研究所所長・名誉教授）

【司会】金城 悟（東京家政大学）

【趣旨】

戦前の「満州」「朝鮮」から引揚げる日本女性は、突如参戦したソ連兵はじめ「敵」方となった外国男性の強姦によって妊娠（「不法妊娠」と呼ばれている）する例が少なくなかった。日本人の自治組織が無事占領地を通過するために人身御供として若い女性が提供される場合もあった。

受け入れる日本政府は上層部の非公式の決定で、当時の墮胎罪を免責して中絶した。その数は千人とも言われるが、断片的な記録しかない。麻酔なし妊娠5~9か月の手術に女たちは声もあげず耐えた、という施術者の証言はあるが、本人の証言はない。「それを言ったらおしまいですから」とその場にいた看護師の証言はあるけれど。語り得ない事実だが、記録されなければならない歴史的事実。語ることによって浄化される場合もあるが、苦難を再現することも多い。そのはざまに立って考える。

13:15~15:45 自由報告部会

自由報告部会1（戦争・移民） 162C 講義室

司会：八木良広（愛媛大学）、北村毅（大阪大学）

1-1 米軍占領と復興に奪われた故郷「金武湾」区—子ども世代による記憶の共有と社会化

謝花直美（沖縄タイムス記者）

1-2 戦時体制下台湾における集団疎開

—台北師範学校女子部の集団疎開体験者の聞き書き調査を事例として

佐藤純子（東京経済大学大学院コミュニケーション学研究科博士課程）

1-3 中国残留日本人女性のオーラル・ヒストリー—移動・家族・従軍看護婦を中心に—

竹原信也（奈良工業高等専門学校）

1-4 ドミニカ日本移民のライフストーリー—記憶の語り—

森川洋子（明治大学大学院教養デザイン研究科博士後期課程）

1-5 福井県の戦傷病者の家族のオーラル・ヒストリー

藤原哲也（福井大学学術研究院医学系部門）

自由報告部会 2 (運動・労働) 162D 講義室

司会：湯川やよい (東京女子大学)、石川良子 (松山大学)

2-1 脱毛症当事者コミュニティの運動史——あるカリスマ的女性を中心に

吉村さやか (日本大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程)

2-2 元自衛隊員のオーラルヒストリー：調査の意義と難しさ

松田ヒロ子 (神戸学院大学現代社会学部)

2-3 ソ連期ウズベキスタンにおける手工芸の社会主義的生産体制と女性の労働経験

：元工場労働者への聞き取り調査から

宗野ふもと (筑波大学人文社会系特任研究員)

2-4 生きている過去：草創期インドネシア地方社会の集团的暴力の語りと現在

山口裕子 (北九州市立大学文学部)

2-5 三陸の突棒漁における困難と漁師の希望—太平洋戦争中～1960年代に着目して—

吉田静 (立教大学大学院社会学研究科)

16:00～18:00 研究実践交流会 161C 講義室

オーラル・ヒストリー／ライフストーリーの現場性を問い、一步を踏み出すために

—「聞くこと」と「書くこと」を結ぶもの／隔てるもの—

【司会】平井和子

【発題者】1. 大門正克「ask から listen へ—聞く現場の身体性回復のために」

2. 倉石一郎「「書く」ことの現場性について—書く実践のよどみとこわばり」

【趣旨】

オーラル・ヒストリーの実践において、「聞くこと」と「書くこと」が車の両輪をなす大切な営みであることに異論の余地はほとんどないだろう。しかしこの二者がどのようにつながり、絡み合っているかという相互関係については、個々のオーラル・ヒストリアンの「流儀」やスタイルの問題として個人化され、公の場でほとんど討議されたり検討されることがなかった。この実践交流会は、聞くことと書くことの「現場性」にこだわり、秘技化されがちなこれらのあり方を公の討議に付し、孤立しがちなオーラル・ヒストリアン間に共同性を回復させることを企図したい。

このうち「聞く」営みの現場性については、大門正克氏の著書『語る歴史、聞く歴史—オーラル・ヒストリーの現場から』(岩波新書、2017年)が明確な展望を与えてくれた。本書のなかで、1970年代以来の長い聞き取り調査の経験をもつ氏が、自身の聞き書きに「大きな壁」を感じ、それを機に Ask から Listen へと、「聞く」姿勢の根本的な態度変更をするに至った経緯が述べられている。生身の人間があい対する「聞く現場」にとことんこだわり、そこで感取された身体性を歴史叙述の根幹に据えるという姿勢である。

そこでこの実践交流会では、まず大門氏から「聞く」ことをめぐる基調提起をいただき、それに触発された形で、倉石一郎から、近著『増補新版 包摂と排除の教育学』の経験を踏まえ、「書く」ことをめぐる応答的問題提起を行う。それに引き続き、会場の参加者が小グループに分かれて意見や疑問を出し合うワークショップ形式で議論を深めていきたい。「聞く」と「書く」との混沌とした

関係性について、参加者が経験を交換（歓）し、報告者も交えて討論することで、各々がいくばくかの道筋を見出していく契機となる場としたい。（文責・研究活動委員会 倉石一郎）

18：15～20：15 懇親会 食堂ルーチェ

第2日目 9月2日（日）

9：30～12：00 自由報告部会

自由報告部会3（文化・メディア） 162C 講義室

司会：矢野泉（横浜国立大学）、米倉律（日本大学）

3-1 基地内クラブとAサインクラブの実態—本土復帰前後を中心に—

澤田聖也（東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文化専攻修士課程）

3-2 ポール・ダンスのオーラル・ヒストリー—セクシー・ダンスからスポーツへ

ケイトリン・コーカー（立命館大学衣笠総合研究機構）

3-3 自然災害と都市文化—岩手県釜石花街に関する聞き取りを中心に—

中原逸郎（京都楓錦会）

3-4 社会派 TV ドキュメンタリーの成立過程の研究、沖縄返還密約をめぐる『メディアの敗北』の研究

西村秀樹（近畿大学人権問題研究所）

3-5 放送史研究における「オーラル・ヒストリー」の考え方と実践的方法論試案

吉田功、広谷鏡子（NHK 放送文化研究所メディア研究部）

10：00～12：00 大会校企画テーマセッション 162D 講義室

女性の声を聴く

【司会】岩崎美智子（東京家政大学）

【コメント】山田富秋（松山大学）

【趣旨】

本セッションの目的は、それぞれの「現場」で女性の声を聴き、彼女らの経験について考察を続けてきた3人の方々の聞き取りの実践から学ぶことにある。

女性が自分の経験を語る（語らない）のはなぜなのだろうか。そして、語られた（語られなかった）言葉からわたしたちは何を受け取るのだろうか。戦前は語られることの少なかった女性の経験を、戦後になって聞き取る試みが各地で行われるようになった。女性が主体的に生きるために、自らに問い、社会と格闘してきたことを、聞き取りを続けてきた研究者・実践者から報告していただき、「聴く」ことの意味や聞き手の役割についても考えたい。

3人のご報告に山田富秋さんからコメントを加えていただくが、フロアからの発言も大いに期待している。

【第一報告】「東北の農婦（おなご）」の声を可聴化するために：石川純子の聞き書きをめぐる一考察
柳原 恵（日本学術振興会特別研究員 PD（立教大学））

報告者は、東北・岩手におけるフェミニズムのありようを明らかにするために、当地において活動してきた女性たちへライフストーリー・インタビューを行ってきた。語り手の一人である石川純子（1942-2008）は、70年代から「東北の農婦（おなご）」の聞き書きを実践してきたフェミニストである。石川の言葉を借りれば、「東北の農婦（おなご）」は、地域、職業階層、ジェンダーの面で複合的に周縁化された「三重の疎外」にある存在である。本報告では、石川の「農婦（おなご）」への聞き書きを、石川自身のライフストーリーも対象にしながらかし分析し、沈黙のうちにある女性の声を可聴化する条件や、聞き書きの経験が石川のフェミニズム思想にもたらした影響について考察したい。

【第二報告】 避難の体験に耳をすまして

薄井篤子（神田外語大学他非常勤講師、特定非営利法人埼玉広域避難者支援センター副代表理事）

2011年3月に発生した東日本大震災と原発事故によって避難した方々に出会い、支援活動の中で少しずつ女性たちに話を聞くようになった。7年経った今、震災以前の生活、暮らしの中での体験を聞くように努めている。耳を傾けていると、あの日までの「あたりまえの日常」の中で自分がどのように生きてどのようなことを大切にしてきたかを本人が再確認するような瞬間がある。それはまた、離れてしまった故郷の、地域の歴史の一部でもある。語ることと聞くことの中で、＜語り継がれること＞が浮かび上がってくる。聞き手の私には、それは女性たちが自分自身と故郷の、これからにつながっていくと思える瞬間でもある。女性たちの体験が孤立せず、受け継げるように一人ひとりの話に耳をすませていきたい。

【第三報告】 突如破られた「沈黙」と日常化されていた「圧力」

山村淑子（地域女性史研究会事務局長）

1978年以降、「あたりまえに生きてきて、何の取り柄もないから話すことはない」と述べた昭和一桁（1926-1935）世代の女性たちとの出会いは、私にとって「あたりまえに生きてきた」女性と戦争の関わり合いを再考する契機となった。交流が積み重なると、「物心ついた時には既に戦争が始まっていた」、「戦争中辛くなかった時間を取り戻したい」、「女に生まれたというだけで奪われていた私の人生を取り戻したい」と、個々の「人生」が語られていくようになる。その過程で、突如、女性たちの内心にしまい込まれていた「沈黙」が破られ、同時に、女性たちに「何も話すことはない」と言わしめた日常化された「圧力」もみえてきた。女性たちの内心から表出された「沈黙」と「圧力」を考察してみたい。

12:05～13:05

総会 161B 講義室

食に聴く・食を書く―食の媒介者たちをめぐる歴史と社会―

【司会】橋本みゆき・倉石一郎

【パネリスト】桜井厚氏、赤嶺淳氏、野本京子氏

【コメント】藤原辰史氏

【趣旨】

個人の体験への接近を通じて社会や文化の歴史的変遷を明らかにすることが、オーラル・ヒストリー研究の目的の一つであるとすれば、「食」のあり方を手がかりにある時代の一面を浮き彫りにするという営みもまた、オーラル・ヒストリーにとって極めて魅力的かつ重要な課題の一つである。また食には「いのちをつなぐ」営みという側面がある（赤嶺淳『食生活誌』学の確立をめざして）赤嶺編『クジラを食べていたころ』新泉社、2011）とすれば、それは人の「生存」を問うライフストーリー／ライフヒストリー研究の焦点となり得ると考えられる。近年、社会学・人類学・歴史学といった関連領域において、食をテーマとする魅力的なモノグラフの刊行が相次いでいる。それらにおいて注目されるのは、食の生産／消費という二分論を超えて、食にたずさわる多様な媒介者の存在―加工者、流通業者、料理人など―にクローズアップし、その声を聞き取ることで豊かな社会像や歴史を描くのに成功している点である。

本学会においても少なからぬ会員が、こうした動きに並行して、あるいはそれ以前からずっと、食や食生活への視点を研究に取り込んだ仕事を蓄積させてきた。しかしそれらの成果は点として存在したままで、これまでそれらを線としてつなぐ場はあまりなかった。今回のシンポジウムが、食をめぐるオーラル・ヒストリー研究がさらに深化・発展を遂げていく契機となれば幸いである。今回のパネリストの三氏およびコメンテータはいずれも、社会学・人類学・歴史学の各分野において食文化や食生活にまつわる歴史・社会研究を牽引し注目すべき研究成果を挙げてきた方々であり、活発な討議が期待される。

（文責・研究活動委員会 倉石一郎）

2. 自由報告要旨

自由報告部会 1（戦争・移民）

1-1 米軍占領と復興に奪われた故郷「金武湾」区―子ども世代による記憶の共有と社会化

謝花直美（沖縄タイムス記者）

本報告では、沖縄戦後に軍用地となり未解放だった那覇市に戻れなかった人々が集住した沖縄島中部の「金武湾区」の発生から隆盛、衰退の歴史を明らかにし、当事者の記録活動を通して、記憶を共有し社会化しようという試みと米軍占領の影響を考察する。

沖縄島中部の旧具志川村に戦後誕生した「金武湾区」はデパートや劇場があり、戦後復興の象徴として知られた。那覇市での生活再建を求めた大人にとっては通過地点でしかないが、子ども時代を同区で過ごした現在 70～80 代には故郷であり、喪失感を抱く。米軍の土地接収は金網の中に多く

の集落を奪ったが、その過程で、社会の記憶から忘れられていった「金武湾」区がもつ意味を論じる。

1-2 戦時体制下台湾における集団疎開

—台北師範学校女子部の集団疎開体験者の聞き書き調査を事例として—

佐藤純子（東京経済大学大学院コミュニケーション学研究科博士課程）

1943年戦況が悪化していく中、疎開に関する実施要綱や促進要綱が日本政府により次々に打ち出されていった。台湾においても例外ではなく官庁や工場、建物の疎開に留まらず、児童・生徒の集団疎開も実施された。台北師範学校女子部も空爆からの避難を余儀なくされ、1945年6月から約半年間、台中州（現在の南投県）に集団疎開を行った。本報告は当時女子学生として、その集団疎開を実際に体験した今年満90歳になる台湾在住の生存者2名に聞き書き調査を行ったものである。当時の記憶を疎開政策や回想録などの文献と照合しながら、終戦直前の統治下台湾における集団疎開の一事例の検証を試みた。

1-3 中国残留日本人女性のオーラル・ヒストリー～移動・家族・従軍看護婦を中心に～

竹原信也（奈良工業高等専門学校）

本報告は、戦後・満州で八路軍に従軍看護婦として留用され、10年にわたり中国国内を転々とした女性のオーラル・ヒストリーである。彼女は中国・済南の日本人居留地で生まれ、満州・女学校時代に挺身看護隊として学徒動員された。終戦後は八路軍に従軍看護婦として留用され中国国内を転々とした。本報告では帝国主義的拡張や戦争といった社会的な出来事に翻弄されながら家族や居住地、職業や立場が転々としていく彼女の体験を「帰国」後の生活も含めて報告する。日赤看護婦を中心とした八路軍従軍看護婦史や日本から満州への移住者を中心とした中国残留日本人史では捉えきれない彼女の体験がどのような意味を持つのか。近年注目されるトランスナショナル・越境研究や近代東アジアの女性移民研究の切り口を参考にしながら考察する。

1-4 ドミニカ日本移民のライフストーリー—記憶の語り—

森川洋子（明治大学教養デザイン研究科博士後期課程）

口頭で話を聞くことの意義の一つは、大きな歴史の流れの中で見過ごされがちな名もなき移民の人たちの声を掬いあげ、個人の抱えている問題をこまやかに掘り下げて、時代と社会の変化との関係で考察することにある。ドミニカ日本移民については、国家賠償訴訟にまで発展した戦後最悪の移民問題として注目されたため、国家の政策と責任に関する問題に集中しがちである。本報告では、「棄民」と言われて訴訟にまで発展した移民物語とは異なるドミニカ移民の経験の解釈もあることを明らかにする。ドミニカ日本移民の高齢化にともない記憶や記録が散逸しつつあり、どのようにドミニカ体験を語り、その記憶に向き合ってきたについて貴重な手がかりとなると考える。

1-5 福井県の戦傷病者の家族のオーラル・ヒストリー

藤原哲也（福井大学学術研究院医学系部門）

本報告では、福井県の戦傷病者の家族（妻）の聞き取りを通じて、彼女たちの福井県傷痍軍人会・

妻の会の活動への参加状況や生活実態を明らかにする。報告者は平成 23 年から現在に至るまで福井県下での戦傷病者の家族への聞き取り調査を実施してきた。戦傷病者の記録に関しては、日本傷痍軍人会機関紙『日傷月刊』や県・地域単位の出版物や手記があり、その中に妻たちの証言も散見されるが、実際どのように彼女たちが傷痍軍人会や妻の会に関わってきたのかなど不明な点も多い。聞き取り調査から彼女たちは戦傷者の配偶者として介護から会の運営まで多様な役割を担ったことがうかがえる。彼女たちの視点から戦後社会における戦傷病者とその家族について考察する。

自由報告部会 2（運動・労働）

2-1 脱毛症当事者コミュニティの運動史——あるカリスマ的女性を中心に

吉村さやか（日本大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程）

近年、脱毛症当事者コミュニティの運動が活発化している。その背景には、例えばセクシュアル・マイノリティなど、これまで社会的に不可視化されてきた人びとによる運動と同様に、髪の毛がないことによって生じる「生きづらさ」は個人的な問題ではなく社会的な問題であると、「声」をあげる当事者が増えてきたことがある。

このような当事者自身による主体的な運動は、1990 年代に萌芽していた。本報告では、その運動史を紐解く一端として、黎明期においてカリスマ的存在とされていた、ある当事者女性のライフストーリーの検討を行う。その作業を通して、当時、彼女はどのようにしてクレームを申し立て、運動を牽引していったのかを明らかにしたい。

2-2 元自衛隊員のオーラルヒストリー：調査の意義と難しさ

松田ヒロ子（神戸学院大学現代社会学部）

本報告の趣旨は、自衛隊研究におけるオーラルヒストリー調査の重要性と、その調査を遂行する難しさ、さらに調査で得られた記録を学術資料として活用することの意義について論じることである。報告者は、2015 年頃より自衛隊の社会史的（あるいは歴史社会学的）研究に取り組んできた。創設期自衛隊（警察予備隊、保安隊含む）の民軍関係を研究するために、2017 年 1 月から 12 月にかけて、全国 20 道府県に在住する元自衛隊員 40 名に対してオーラルヒストリー調査を実施した。インフォーマントは全員、1950 年代から 60 年代に陸上・海上・航空自衛隊で勤務した男性である。個人的に自衛隊と全く縁のなかった報告者が、どのように調査対象者とコンタクトをとり、調査を実施したのかプロセスを紹介しつつ、得られた口述資料の一部について検討を加えたい。

2-3 ソ連期ウズベキスタンにおける手工芸の社会主義的生産体制と女性の労働経験

：元工場労働者への聞き取り調査から

宗野ふもと（筑波大学人文社会系特任研究員）

本報告は、ソヴィエト連邦時代（1924 年～1991 年）の中央アジア、ウズベキスタン南部の地方都市に存在した、民族帽子や絨毯を生産する「フジュム」芸術製品工場に着目する。そして、工場 で働いた女性への聞き取り調査に基づき、ソ連時代にウズベキスタンの女性が経験した社会主義的近代化とはいかなるものだったのかを考察することを目的とする。「フジュム」芸術製品工場は、「女

性解放」の理念のもとに 1928 年に設立され、1970 年代には約 2000 人の女性労働者が働いていた大工場であった。本報告では、まず「フジウム」芸術製品工場の設立と拡大の経緯を公文書館資料を用いて明らかにする。第二に、元労働者の語りを紹介しながら、彼女たちにとって社会主義体制の下での労働がいかなる経験だったのかを考えてみたい。

2-4 生きている過去：草創期インドネシア地方社会の集団的暴力の語りと現在

山口裕子（北九州市立大学文学部）

本発表では、草創期インドネシア最大の分水嶺となったクーデター未遂とされる「9月30日事件」のあとで、共産主義一掃の旗印の下での集団的暴力にさらされた地方社会の動態とその今日的意味を、当事者の語りに基づき考察する。特に一連の出来事から 50 年余りが経過した今日、その過去が想起され語られるモメントや、民主化とともに形成されつつある当時をめぐる集合的記憶からは逸脱するようなエピソードや諸特徴に注目する。主体によって制御されない記憶の側面や、語り手を「被害者」「加害者」などの一元的アイデンティティから解放しようとする近年の関連諸分野の成果を参照しながら、人間と過去とが切り結びうる多様な関係性について考えてみたい。

2-5 三陸の突棒漁における困難と漁師の希望—太平洋戦争中～1960年代に着目して—

吉田静（立教大学大学院社会学研究科）

三陸沖では、船の上から 4 メートルほどの銚で漁獲対象を突く突棒漁（つきんぼうりょう）が盛んに行われていたが、儲かる漁ではなくなっていくなかで、突棒漁の従事者は減り、小規模な漁のみがわずかに存続している。本報告ではまず、太平洋戦争中～1960年代に三陸沿岸の漁村の突棒漁師が直面することになった突棒漁を取り巻く困難を示していく。その上で、困難な状況を打開するために期待をかけたオットセイ漁への解禁運動に触れ、解禁運動の不結実という結果がどのように受け止められているのかを突棒漁に関わる人びとへの聞き取り調査から明らかにしていく。そうすることを通じて、不結実の結果を追認することや過去へのノスタルジーに浸ることなく、漁師にとっての希望の所在を考察する。

自由報告部会 3（文化・メディア）

3-1 基地内クラブと A サインクラブの実態—本土復帰前後を中心に—

澤田聖也（東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文化専攻修士課程）

復帰前後における沖縄のロック・ミュージシャンの演奏場所は基地内クラブと A サインクラブであった。前者は米軍基地内にある米軍主導のクラブ、後者は基地周辺にある民間主導のクラブであり、両者は沖縄にありながら「アメリカ的体験」ができる特異な空間であった。こうした場所に入りできる人は沖縄の人でも一部の関係者だけであり、その空間が一体どのようなものだったのかほとんど明らかにされていない。

本報告では、復帰前後(1960年代半ば～1970年代後半)の基地内クラブと民間クラブで活動していたミュージシャンにインタビューをすることで、2つのクラブのシステムや音楽、契約、環境等を整理し、ミュージシャンの視点から見た演奏空間の実態を把握する。

3-2 ポール・ダンスのオーラル・ヒストリー—セクシー・ダンスからスポーツへ

ケイトリン・コーカー（立命館大学衣笠総合研究機構）

本発表の目的は、関西のポール・ダンスのオーラル・ヒストリーを作成し、2005年から現在までの期間をポール・ダンス歴の過渡期として明らかにすることである。より具体的にいうと、この間でポール・ダンスは、①風俗の職種から一般女性が自分の性やジェンダーに向き合える習い事へ、②セクシー・ダンスから技で競い合うスポーツへ、③女性向けのみの習い事から男性ならびに子供向けの実践へ、と変容しつつである。総合的にこれらは直線的な変容ではなく、ポール・ダンスの多様化である。本発表で、なぜポール・ダンスは実践者および環境によってセクシー・ダンスにもスポーツにもなりうるのかを考察し、国際的な現象の一部分ならびにローカルな現象としてその実践を描き明白にする。

3-3 自然災害と都市文化-岩手県釜石花街に関する聞き取りを中心に-

中原逸郎（京都楓錦会）

花街は芸舞妓が芸（芸能と同義）と地元言葉による会話で、顧客を楽しませる場である。ところで、岩手県には昭和40年代後半（1970～）までは釜石、遠野等10花街が存在した。釜石花街には漁業関係者と造船業者が育てた独特な「おでんせ（おいでください）」文化と呼べる接待文化があったと言う。釜石花街と東京八王子花街の交流は、東日本大震災（2011）時に遡る。震災による津波で楽器、着物ほか芸妓（者）業に関わる諸道具を失い避難所暮らしの釜石最後の芸妓に八王子花街の女将が三味線を差し入れたことが契機であった。本発表では震災における釜石と八王子花街の芸と心の交流を振り返る。

3-4 社会派TVドキュメンタリーの成立過程の研究、沖縄返還密約をめぐる『メディアの敗北』の研究

西村秀樹（近畿大学人権問題研究所）

昨年に続く第二弾の発表（社会派TVドキュメンタリーの成立過程の研究）。本作品（沖縄のローカル局琉球朝日放送が2003年放送）は沖縄返還密約を取り扱ったドキュメンタリー作品である。この事件をめぐるのは、澤地久枝『沖縄密約』岩波現代文庫と山崎豊子『運命の人』文春文庫を持ち出すまでもなく、日本の戦後メディア史に記録される大きな事件であるが、その一方で、日本政府の沖縄密約をすっぱ抜いた凄腕新聞記者・西山太吉は国家公務員法（機密漏洩のそそのかし）違反に問われ検察はネタ元の女性外務省職員との間の男女問題に論点をすり替えた。

土江は長く沈黙を守る西山を説得し番組を完成させた。その成立過程をインタビューした。

3-5 放送史研究における「オーラル・ヒストリー」の考え方と実践的方法論試案

吉田功、広谷鏡子（NHK放送文化研究所メディア研究部）

放送史研究においては、文書資料や映像・音声に加え、放送の発展に寄与した人々の証言が用いられてきた。NHK放送文化研究所では、関係者の証言を収集し、「放送のオーラル・ヒストリー研究」を数年前から続けているが、その共通基盤となる考え方、方法論については、現在も模索中で

ある。そこで今回は、所内で実施した「オーラル・ヒストリー研究会」での議論をベースに、放送史に適用していくための「オーラル・ヒストリー」の基本的な考え方と、具体的な方法論について報告する。特に、①「聞き取りに際して」の留意すべきポイント、および、②貴重な証言を活用できる記録とするための「保存、整理、活用について」の2点を中心に、実践に役立てるための提案としたい。

Ⅱ. 理事会報告

1. 第八期第3回理事会 議事録

日時：2018年6月16日（土）

場所：上智大学2号館6階615a

出席者：（以下、敬称略）蘭、人見、上田、田中、倉石、橋本、根本、佐々木、佐藤、山田、大門、
中村、矢吹、岩崎、オブザーバー参加：滝田祥子

欠席：北村、石川

議事録作成者：中村

1. 前回議事録

MLで確認済。

2. 会長から

本日理事会の議題の提案。

3. 編集委員会報告

学会誌は4月に第1回編集委員会を開催。ページ数は例年同様の予定。7月中に編集委員会を開催予定。広告を各出版社に依頼して欲しいと理事に依頼あり。

4. 研究活動委員会報告

・実践ワークショップ「現地と作品を結ぶ」の報告

「著者とともに『消されたマッコリ。』の舞台裏を歩く」

申込20人（1人欠席、1人キャンセル待ち参加）、研究活動委員5人、計25人で実施。

・大会スケジュール案

9月1日（土）

10時30分～11時30分 理事会

11時～ 受付開始

12時～13時 講演会「語り得ぬ性被害—戦時暴行による妊娠と中絶をめぐる—」（※JOHAと女性未来研究所の共催。）

13時15分～15時45分 自由報告部会

自由報告部会（1）戦争・移民

自由報告部会（2）運動・労働

16時～18時 実践交流会「(仮)「AskからListenへの転機」をどう引き受けるか—『語る歴史、聞く歴史』と「生存の教育社会史」の架橋」

18時15分～ 懇親会

9月2日(日)

9時30分～12時 自由報告部会 文化・メディア

10時～12時 大会校テーマセッション「女性の声を聴く」

12時5分～13時5分 総会

13時30分～16時30分 シンポジウム「食に聴く・食を書く一食の媒介者たちをめぐる歴史と社会」

・写真の展覧について

ロビー、シンポジウム会場などに写真を展覧。大会校からのロビー等の使用許可を待つ。

5. 大会について

・大会開催校より

5月教授会にて正式な開催が承認・決定。近隣に食堂やコンビニエンスストア等がないため、初日理事会と二日目のシンポジウム登壇者にお弁当の用意。詳細は後日メールで連絡。

・大会ボランティアについて

ボランティアの方には大会実行委員会としてニュースレター等にお名前を記載。お弁当は準備する。

6. 広報委員会報告

・ニュースレター

プログラム完成後、7月後半にニュースレターを発行するため、ニュースレターの締切は6月末。

・大会ポスター

ポスターは今後準備。講演会、テーマセッション、シンポジウムはポスターに盛り込む。

・ML

MLが削除されてしまった件についての報告。

7. 会計報告

・2017年度決算報告

・懇親会費について

懇親会費は予算案の段階で大会収入に含める。本日提出された決算報告は修正する。

・大会校予算について

会計は謝金・人件費の管理、大会校は大会校使用分という方向で、引き続き調整していく。参加費の値上げも今後検討していく。

・学会活動に伴う経費について

学会活動に伴う運営費や旅費は今後は事前に申請する。

・不明会員について

理事が不明者に連絡するなどして、住所等を特定化する。

- ・見積書・請求書の支払い差額について

インターブックス社による配送料について、実支払額と書類の間に差額があり、会計から連絡。調整の結果、3,240 円の払戻を受ける。

- ・出納帳の調整について

2017 年度は CiNii 著作権料は支払いがないものとして通過していたため、前年度入金確認できなかった。見落としがあった利子 3 円と合わせて、前会計より不足分を補填。

8. 事務局報告

- ・新入会員（9 名）、退会（10 名）、3 年間会費未納による退会（11 名）

9. 次期開催予定校より

- ・2019 年度大会開催予定校

横浜市立大学・滝田祥子先生より挨拶、9 月 7 日・8 日に大会予定

次回理事会 2018 年 9 月 1 日（土）10 時 30 分～、場所：東京家政大学

Ⅲ. お知らせ

1. 会員異動（2017年12月4日～2018年6月16日）

(1) 新入会員（入会申し込み順）

クレアリー寛子	社会人
山田雄三	福岡大学福岡・東アジア地域共生研究所
沼田彩誉子	早稲田大学大学院
藤川杏奈	横須賀市市史資料室 非常勤職員
宗野ふもと	筑波大学人文社会系 特任研究員
澤田聖也	東京芸術大学音楽研究科 修士課程
吉田功	NHK 放送文化研究所メディア研究部
吉田静	立教大学大学院社会学研究科社会学専攻
松田ヒロ子	神戸学院大学現代社会学部

(2) 退会

松田凡、桂川泰典、佐藤正和、長島達也、片山淳、青木深、中村安秀、船橋純一郎、大石友則、申美花、奥村育栄、加藤真規子、白井麻衣子、菅谷泰行、関口定一、柄越祥子、David H. Slater、野原みゆき、松岡昌和、本井優太郎、山本唯人

※連絡先（住所・電話番号・E-mail アドレス）を変更された場合は、できるだけ速やかに事務局までご連絡ください。

（事務局長 人見佐知子）

2. 2018年度（2018年4月1日～2019年3月31日）会費納入のお願い

平素は、学会運営へのご協力をありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金のほどよろしくお願いいたします。

会費のご納入につきましては8月末日までをお願いいたく存じます。学会誌の一斉発送の時期を過ぎますと、ご納入確認がとれた後に、個別に学会誌発送手続きをとらせていただくことになってしまいます。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

また、一部ですが2017年度分、2016年度分についても未納の会員さまがいらっしゃいます。こちらも早めのご納入をよろしくお願いいたします。

■年会費

一般会員：5000円 学生・その他会員：3000円

*「学生・その他会員」の「その他」には、年収 200 万円以内の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に払込票等にその旨明記してください。

*年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

*払込取扱票（ゆうちょ銀行の青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

*従来の記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番：019

店名（カナ）：〇一九店（ゼロイチキューウ店）

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名：（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便払込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて、個別に領収書も発行させていただいておりますので、その際にご連絡下さい。その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の上田(uedanota (at) kindai.ac.jp)までお問い合わせください。

（会計 上田貴子）

.....

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

JOHAニューズレター第34号

2018年7月17日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒577-0813 大阪府東大阪市新上小阪228-5

近畿大学Eキャンパス文芸学部 人見佐知子研究室内

日本オーラル・ヒストリー学会事務局

E-mail joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp

* 郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。
